

幼稚園卒園児の小学校適応（1） —幼稚園時の発達との関連—

Adaptation of graduates of kindergarten to primary school life (1) : Relation to the development at kindergarten

長田 瑞恵
Mizue NAGATA

野口 隆子
Takako NOGUICH

関口はつ江
Hatsue SEKIGUCHI

要 約

本研究は、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には子どもの生活のどのような側面が関連しているのか、また、小学校適応は幼稚園時の発達と関連するのかを縦断的に検討した。方法としては、幼稚園年長児クラスの時点での子どもの発達を、知的、身体、情緒、社会の4領域について尋ねる質問紙を用いて担任教諭に評価していただいた。さらに、小学校1年生の時点での子どもの状態を、友達関係や先生に馴染んだかなどの適応、勉強や身体状況などの子どもの生活面について尋ねる質問紙を用いて母親に評定していただいた。その結果、小学校への適応に関する生活調査の結果から、母親の目から見れば、全体としては子どもの適応状態はほどほど良いようであり、小学校への適応の良い子どもほど、勉強、身体状態、心の状態などが良好であったことが明らかになった。また、幼稚園時の発達検査結果との対応から、幼稚園時の発達は小学校への適応と関連していることが示された。特に、幼稚園時の知的発達が小学校への適応や小学校時の生活諸側面の多くと関連していることが示された。

キーワード：小学校適応 発達評価 生活調査 縦断的検討

問 題

本研究は、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には子どもの生活のどのような側面が関連しているのか、また、小学校適応は幼稚園時の発達と関連するのかを明らかにすることを目的とする。

近年、教育現場から「小1問題（プロブレム）」と呼ばれる幼児教育から学校教育への移行期に生じる「学級がうまく機能しない（学級経営研究会，2000）」現象が報告され、幼児期から

児童期への移行の問題について考える必要に迫られている。この現象は、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程で発生すると考えられる。それでは、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には、子どもの生活の中のどのような側面が関連しているのだろうか？小学校によりよく適応できる子どもは、どのような生活を送っているのでしょうか。反対に、小学校にうまく適応できない子どもは、生活の中のどのような側面にどのような特徴を有するのであるだろうか？本研究は、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には子どもの生活のどのような側面が関連しているのかを明らかにすることを第1の目的とする。

また、小学校環境への適応を考えるときに、幼児期から児童期への発達の連続性について考慮することも重要である。「幼（保）小連携」という言葉に代表されるように、幼児教育における今日の問題として幼児期から児童期への連続性に関する問題の関心が高まっている。中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最前の利益のために幼児教育を考える—」（平成17年1月）では、今後の幼児教育の方向について、家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進とともに、幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実に取り組むよう提唱している。先述の「小1問題（プロブレム）」に関しても、問題への対応策を模索する試みの中から「幼児期から小学校低学年にかけての子どもの成長・発達を一貫したものとしてとらえる実践（高田，2004，p16）」が行われるようになった。このように、幼児期から児童期への連続性の重要性は認識が深まりつつあるが、幼児期から児童期にかけて子どもたちがどのように発達するのかについて、それぞれの子どもの発達の連続性という観点から検討した実証的研究はこれまでのところ少ない。そこで、本研究は、小学校適応は幼稚園時の発達と関連するのかを実証的に検討することを第2の目的とする。

方 法

調査協力者 福島県郡山市の私立幼稚園3園を卒園した児童107名とその母親にご協力いただいた。107名の園児のうち66名については幼稚園通園時の児童の担任教諭にもご協力いただいた。

刺激と手続き 質問紙法を用いた。

(1)**幼稚園発達調査** 関口(2003)で使用した発達評価質問紙を用いた。幼稚園年長児クラスの時点での子どもの発達を、知的、身体、情緒、社会の4領域について尋ねる質問紙であった。調査項目は知的領域18項目、運動的領域28項目、情緒的領域31項目、社会的領域27項目の計104項目であった。この質問紙を幼稚園通園時の児童の担任に配布し、それぞれの子どもについてそれぞれの項目を「出来る・よくする」から「できない・しない」の5段階尺度で評定していただいた。

(2)**小学校生活調査** 友達関係や先生に馴染んだかなどの適応、勉強や身体状況などの子どもの生活面について尋ねる質問紙であった。Table 1に質問内容を示す。それぞれの質問について、母親に子どもの様子を5段階で評定していただいた。

Table 1 質問項目**適応を尋ねる質問**

学校でのことを自分から話しますか。
 学校での友達関係はいかがですか。
 学校は楽しそうですか。
 先生には馴染みましたか。

その他の側面を尋ねる質問

入学後の身体状況
 宿題や学校の支度は自分でしますか。
 勉強は易しそうですか。
 次のことに関して、幼稚園の時と比べて変わりましたか。
 生活時間は規則正しいか
 食事はよく食べるか
 片づけなどの身の回りの生活習慣
 遊びや物事への興味関心
 心の状態は安定しているか
 お母様お父様に対して自立的か

調査時期 幼稚園発達調査は、対象児が幼稚園年長児クラスに在籍していた2003年6月に、その時点での対象児の状態について担任教諭に評定を求めた。小学校生活調査は、対象児が小学校1年生クラスに在籍していた2004年8～9月に、1年生1学期を振り返る形で対象児の母親に記入を求めた。

結 果**(1)小学校適応の検討**

質問紙に含まれる質問項目に対して母親が評定した平均値をFigure 1に示す。得点が高いほど、適応的で肯定的な状態であることを示す。全ての質問項目について、中央値の3を上回る評定がなされていることから、母親の目から見れば、全体としては子どもの適応状態はそれほど良いようである。中でも「学校は楽しそうか」「先生に馴染んだか」「身体状況はよいか」という質問に対しては評定値が高い傾向が伺われ、新しい小学校生活を健康に楽しんでいる子どもの様子が伺われる。その一方で、「宿題や学校の支度を自分でする」「勉強は易しそうか」という質問に対しては、相対的にはやや低めの評定がなされている。このことから、幼稚園時代とは大きく異なる学業の面では十分には馴染めていない可能性が伺われる。

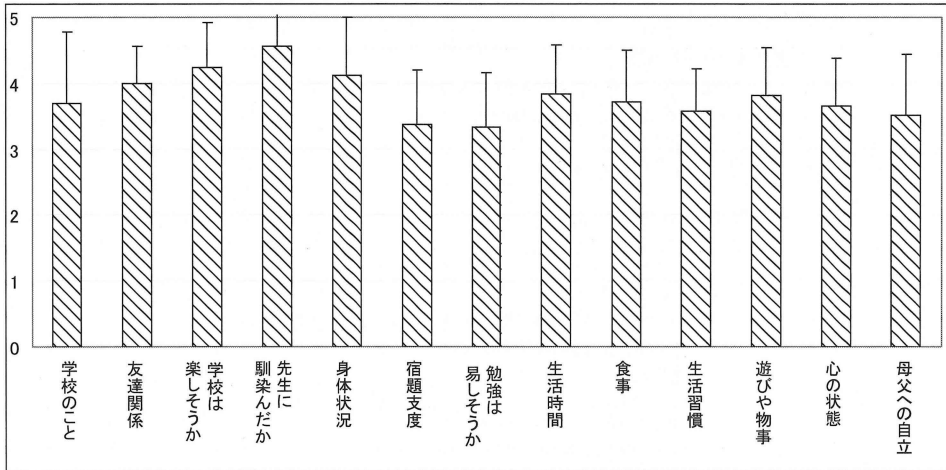


Figure 1 各質問の平均値

次に、質問紙に含まれる質問項目間で相関係数を算出した (N=107)。Table 2に相関係数を示す。適応を尋ねる項目間での相関はおおむね有意であった。特に、「友達関係」と「楽しいか」との間の相関が高いことから、小学校適応において友達関係が重要である可能性が示された。また、「先生に馴染んだか」と適応を尋ねる項目の合計との相関が高いことから、小学校適応に担任教師との関係が大きな役割を果たしている可能性が考えられる。

Table 2 適応とその他の要因との相関

	適応を尋ねる項目				
	学校でのこと	友達関係	楽しいか	先生に馴染んだか	適応項目合計
適応を尋ねる項目					
友達関係	0.26 **				
楽しいか	0.31 **	0.55 **			
先生に馴染んだか	0.21 *		0.31 **		
適応項目合計	0.34 **	0.26 **	0.39 **	0.60 **	
他の側面を尋ねる項目					
勉強	0.32 **		0.19 *	0.32 **	0.26 **
宿題支度	0.29 **	0.31 **			0.33 **
身体状況		0.31 **	0.36 **		
身体状況+食事		0.30 **	0.35 **		
遊びや物事	0.19 *	0.24 *	0.28 **		
心の状態	0.23 *	0.19 *	0.24 *		
母父に自立的		0.19 *			
	*	5%水準有意		**	1%水準有意

適応を尋ねる項目と、生活の中の諸側面との間の相関から、適応の良い子どもほど、勉強、身体状態、心の状態などが良好であることが示された。特に、「身体状況」や「遊びや物事に興味関心を示す」と、適応項目である「楽しいか」「友達関係」との相関が高いことから、身

体的な状態が良く精神的にも好奇心が旺盛であるという心身共に健康な状態が、小学校適応においては重要であると言える。また、「勉強は易しそうか」と適応項目の「学校でのことを話す」「先生に馴染んだか」との間の相関も高い。このことから、幼稚園と大きく異なる学業の面で良好であることが小学校適応において重要であることが伺われる。ただし本研究は相関研究であるため、小学校適応と心身の健康状態や学業との因果関係については、今後のさらなる研究が待たれる。

(2)幼稚園時の発達との関連

幼稚園時の4領域の発達について、達成率をFigure 2に示す。

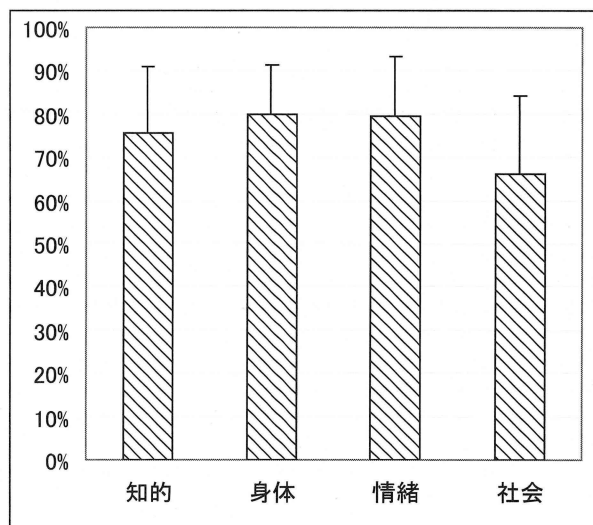


Figure 2 幼稚園時の発達の達成率

幼稚園時の発達評定と小学校入学後の様子の評定との間で相関係数を算出した (N=66)。Table 3に相関係数を示す。幼稚園時の知的発達と小学校時の適応項目合計とが相関することから、幼稚園時に知的発達が進んでいると、全体として適応が良好であることが示された。また、幼稚園時の知的発達や身体発達と小学校時の「先生に馴染んだか」とが相関することが示され、幼稚園時に知的、身体的に発達が進んでいると、小学校で先生に馴染みやすいということが示された。また、適応以外の小学校時の生活諸側面も幼稚園時の発達と相関することが示された。特に、幼稚園時の知的発達は小学校時の生活諸側面の多くと相関している。また、小学校時の適応項目とは相関のなかった幼稚園時の社会性発達が、小学校時の「父母からの自立」と相関していることは興味深い。これらのことから、全体的に見て、幼稚園時の発達は小学校への適応に関連があると言える。

Table 3 縦断的検討: 幼稚園時の各領域の発達と小学校入学後の適応との相関

幼稚園時 発達領域	幼稚園時 発達領域			
	知的	身体	情緒	社会
身体	0.49 **			
情緒		0.40 **		
社会	0.49 **	0.60 **	0.62 **	
小学校 適応				
学校でのこと				
友達関係				
楽しいか				
先生に馴染んだか	0.30 **	0.27 *		
適応合計	0.25 *			
小学校 その他				
身体状況	0.25 *			
勉強	0.39 **			
宿題支度		0.26 **	0.25 *	
母父	0.26 *		0.26 *	0.32 **
	*	5%水準有意	**	1%水準有意

考 察

本研究は、縦断的に発達評価や生活調査を行うことによって、幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には子どもの生活のどのような側面が関連しているのか、また、小学校適応は幼稚園時の発達と関連するのかを明らかにした。

まず、小学校への適応に関する生活調査の結果から、母親の目から見れば、全体としては子どもの適応状態はほどほど良いようであった。子どもは新しい小学校生活を健康に楽しんでいるようであったが、一方で、幼稚園時代とは大きく異なる学業の面ではどちらかといえば十分には慣れていない可能性もあるようであった。さらに、小学校への適応の良い子どもほど、勉強、身体状態、心の状態などが良好であったことが明らかになった。

次に、幼稚園時の発達評価の結果との対応から、幼稚園時の発達は小学校への適応と関連していることが示された。特に、幼稚園時の知的発達が小学校への適応や小学校時の生活諸側面の多くと関連していることが示された。

ここで、小学校適応における担当教師の役割に注目したい。本研究の結果から、「先生に馴染んだか」が「学校でのことを話すか」「楽しいか」と関連していたこと、幼稚園時の発達と、入学後の「先生に馴染んだか」との関係が関連することが示された。このことから、小学校適応に担任教師との関係が大きな役割を果たしている可能性が考えられる。またこの結果は、小学校生活調査を記入した母親自身の関心の焦点を反映している可能性も考えられる。

今後は、より長期的な視点から小学校適応について検討していく必要があると考える。具体的には同一対象児をさらに追跡し、学年が進んだ時の適応過程について検討することができよう。さらに、幼稚園時の発達との関連について、より詳細に検討することが必要である。具体的には卒園した幼稚園の保育方法の違いによって、小学校適応の過程が異なる可能性について検討することができよう。

文 献

- 中央教育審議会(2005) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について－子どもの最前の利益のために幼児教育を考える－」。
- 学級経営研究会(2000) 「学級経営をめぐる問題の現状とその対応－関係者間の信頼と連携による魅力ある学級づくり－」。
- 関口はつ江(2003) 「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連に関する予備的研究」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 1, 27-39.
- 高田一宏(2004) 「幼児期から小学校低学年期の子どもの育ち」 大阪府人権教育研究協議会(編) 「わたし出会い発見Part5」 大阪府人権教育研究会：大阪。

付 記

本論文は日本発達心理学会第16回大会における発表に加筆修正をして作成したものです。本研究の実施にあたっては、人間生活学部共同研究費の助成を受けました。

英文要約

This study longitudinally examined what aspect of child life relates to the process when those children who finished kindergarten adapt to the environment of primary school, and whether children's adaptation to primary school life is related to the development at kindergarten. As an approach, a questionnaire for assessment was administered to homeroom teachers of the children, inquiring about the four areas-intellectual, physical, emotional, and social-of child development during an older age class at kindergarten. A survey was also conducted with the child's mothers, using a questionnaire on how their child was doing at the first grade of primary school. The questions were focused on the child's life, including subjects like schoolwork, physical condition, and adaptability at school, i.e. whether the child became acquainted with his/her peers and teacher. As a result, the living survey on children's adaptation to primary school showed that children's overall adaptation conditions are fairly good, and it became clear that a child with more capabilities to adapt to primary school was in a more favorable condition for the body, study, and mental health. The findings also indicate that in reference to the development test results during kindergarten, the child's development correlates with the adaptation to primary school. It proved in particular that children's intellectual development during the kindergarten years is linked to adaptation to primary school and many aspects of school life.

Key Words : Adaptation to primary school life, Development assessment, Living survey, Longitudinal examination